

2022年9月24日

2022年度前期 第1学年学修成果アンケートの結果と考察

宮城学院女子大学 IR担当

はじめに

本学では2021年度から全ての学部学科専攻においてディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッションポリシーのいわゆる三ポリシーの見直し作業を行い、アセスメント・プランを整備した。その流れの中で、学生のディプロマ・ポリシーに対する到達度を測定し、適切な形成的評価を加えることによって、学生の学修成果を担保する取り組みが必要とされている。これは同時に、学生の学修成果をもとに各ポリシーや具体的なカリキュラム、さらには各授業科目の改善を進めることとなる。

このような状況の下、本学では2022年度前期に、新ポリシーにもとづく学修成果を把握するためのループリックの整備を行い、学期末に「学修成果アンケート」を実施した。本アンケートは、学生が所属学科のディプロマポリシーの各項目についてカリキュラムループリックを用いて、自らの到達度を自己評価するものであり、学生の主観的な評価のみが反映されている。そのため、評価のエビデンスとなるパフォーマンスや評価水準について学生と教員に大きな差が見受けられる。これらの差は、学科単位、あるいは全学的なカリキュラムループリックの調整に必要な情報であり、カリキュラムループリックによる学修成果の可視化の第一段階として多くの示唆を教員陣に提供するものである。

以下に、今回のアンケートの概要を示し、教員陣が考えるべきことがらについて考察する。

1 アンケート概要

本アンケートは2022年度前期授業最終週から後期授業第1週にかけてウェブアンケート形式で実施した。2022年9月29日現在、IR部門で把握している回答状況は、1年次在籍者数774名に対して546件であり、回答率は70.5%となっている。学科ごとの回答数、回答率は図表1に示すとおりである。

	在籍者数	回答数	回答率
現代ビジネス学科	105	34	32.4%
教育学科児童教育専攻	60	56	93.3%
食品栄養学科	112	108	96.4%
生活文化デザイン学科	57	18	31.6%
日本文学科	93	68	73.1%
英文学科	57	56	98.2%
人間文化学科	50	26	52.0%
心理行動科学科	82	79	96.3%
音楽科	13	6	46.2%
教育学科幼児教育専攻	102	95	93.1%
教育学科健康教育専攻	43	0	0.0%

図表1 学修成果アンケート回答状況

2 アンケート結果と考察 (1) 全学共通 DP について

全学共通ディプロマ・ポリシーに対する学生の自己評価の項目別・学科別の平均値を図表 2 に示す。全項目／全学科の平均値は 2.40 となっており。多くの学生が各項目についてレベル 2 以上の専門教育に対応可能な状況にあるという自己評価を下している。

項目別には、「DP1.自己受容：他者とのつながり」が 2.78、「DP2.共生：協働」が 2.71、「DP2.共生：意思疎通」が 2.56、「DP3.リベラルアーツ：多角的視点」が 2.56 と、他者とのコミュニケーションに関する項目で高い自己評価となっている。

学科別には、食品栄養学科が 1.66、英文学科が 1.83 と低い値を示しているが、1 年生前期終了時点であることを考えれば、むしろ適切な自己評価をしたと考えるべきである。

なお、教育学科幼児教育専攻については、全学共通項目に対する自己評価のデータがなかったため、図表 2 には含んでいない。

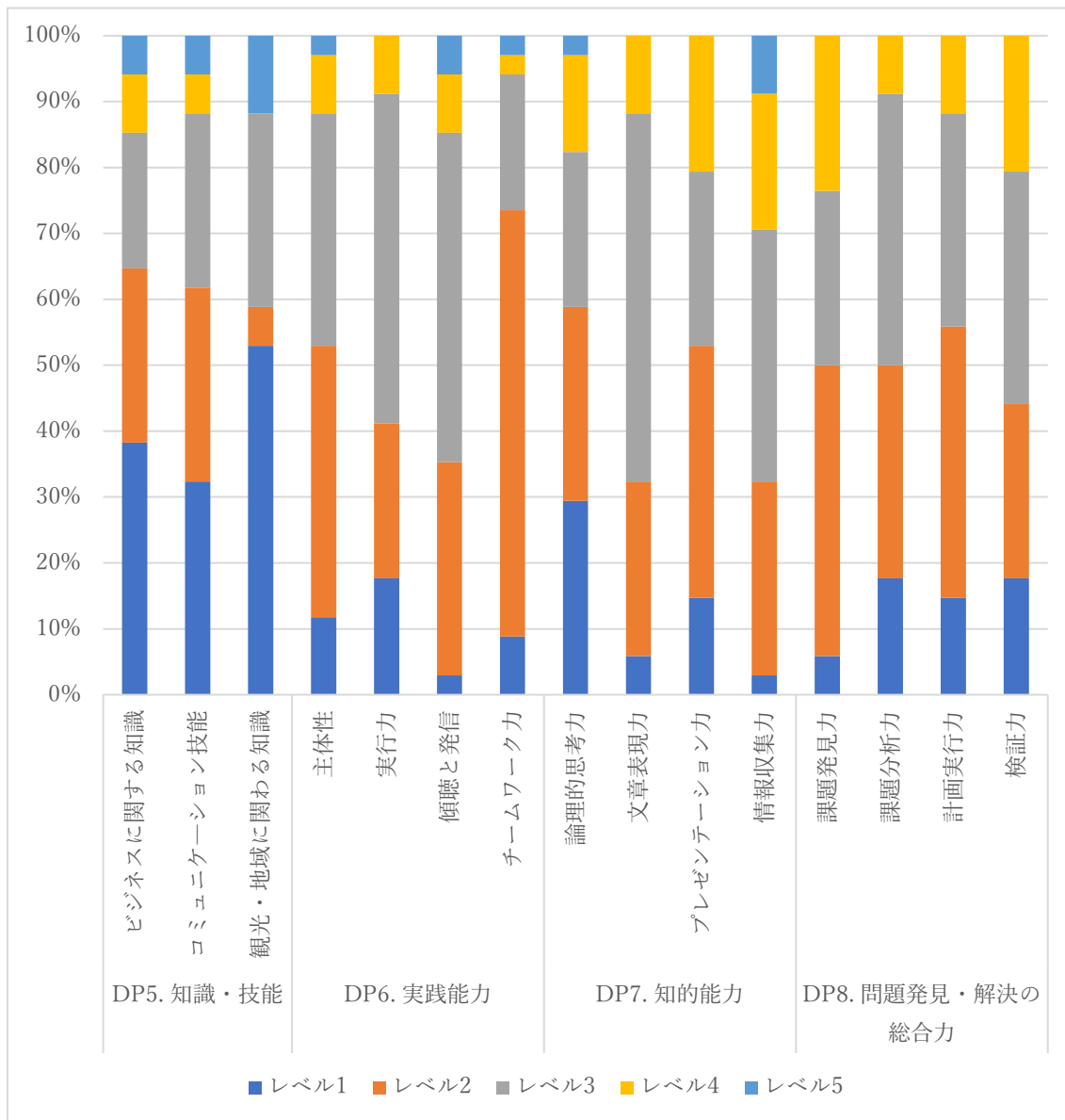
	DP1. 自己受容		DP2. 共生			DP3. 女性のキャリア				DP4. リベラルアーツ			学科 平均
	自己 肯定	他者 との つながり	自己 評価 と向 上	社会 的関 心	協働	意思 疎通	女性の 生き方 キャリア 形成に 関する 問いの 設定	女性 学・ジ ェンダ ー論的 探究、 知識	女性の 生き方 キャリア 形成に 関する 分析・ 考察	表現	多角 的視 点	探求	
現代ビジネス学科	2.44	3.09	2.65	2.82	3.12	3.18	2.82	2.68	2.18	2.18	2.85	2.41	2.70
教育学科 児童教育 専攻	2.82	3.11	2.93	2.70	3.29	2.88	2.82	2.71	2.48	2.36	2.79	2.57	2.79
食品栄養 学科	1.71	2.06	1.69	1.70	1.72	1.58	1.77	1.72	1.41	1.41	1.68	1.49	1.66
生活文化 デザイン 学科	2.33	2.78	2.59	2.78	2.78	2.83	2.56	2.39	2.17	2.44	2.78	2.39	2.57
日本文学 科	2.56	2.90	2.61	2.68	2.78	2.78	2.93	2.58	2.29	2.25	2.88	2.61	2.65
英文学科	2.11	2.43	2.05	2.09	2.07	1.68	1.64	1.80	1.27	1.39	2.11	1.32	1.83
人間文化 学科	2.56	2.73	2.19	2.92	2.54	2.38	2.69	2.08	1.96	1.85	2.65	2.27	2.40
心理行動 科学科	2.29	3.06	2.41	2.41	2.80	2.76	2.52	1.85	1.75	1.74	2.66	2.24	2.37
音楽科	3.33	2.83	3.00	1.83	3.33	3.00	2.50	2.17	1.83	2.67	2.67	2.83	2.67
項目平均	2.46	2.78	2.46	2.44	2.71	2.56	2.47	2.22	1.93	2.03	2.56	2.24	2.40

図表 2 全学共通ディプロマ・ポリシー各項目に対する自己評価平均値

3 アンケート結果と考察 (2) 学科固有 DP について

3.1 現代ビジネス学科

現代ビジネス学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 3 のとおりである。「DP6. 実践的能力」の「実行力」と「傾聴と発信」、「DP.7 知的能力」の「文章表現力」、「情報収集力」、「DP8. 問題発見／解決の総合力」の「検証力」については、自己評価がレベル 3 以上の学生がそれぞれ 50%を越えている。



図表 3 現代ビジネス学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=34)

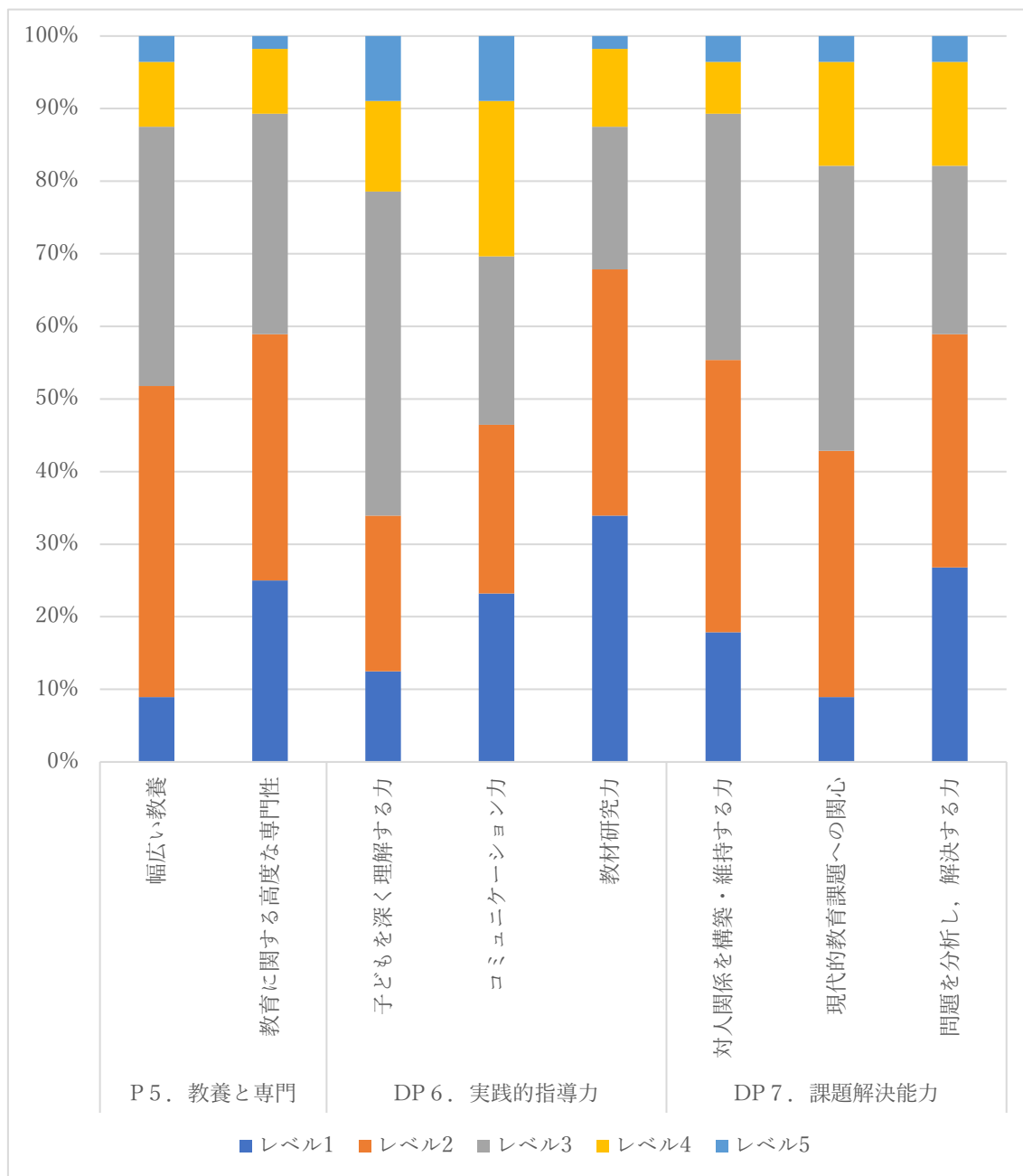
また、回答率が 32.4%と必ずしも高い状態にあるにもかかわらず、各項目でレベル 4 以上（卒業要件以上）と自己評価している学生が一定数存在する。ルーブリックの尺度とし

ては、特に設定が低すぎるというものではなく、学生の自己評価が不相応に高いということは、①ルーブリックの内容を十分に理解せずに回答した、②どのレベルに自分が相当するのかを判断する基準が甘かった、③すでに十分な事業経験がある（社会人入学生等）のいずれかである可能性が高い。

個別の学生のデータを見ると、学科固有項目の平均値が4.2の学生が1名、3.8の学生が2名となっており、全体として大学卒業程度の能力を有しているという自己評価をしている。これらの学生が高い自己評価を示している点については、追跡が必要である。

3.2 教育学科児童教育専攻

教育学科児童教育専攻の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 4 のとおりである。教育学科児童教育専攻では回答率が 99.3%と高く、全体の傾向が十分に反映されていると考えられる。それを前提に、学生の自己評価の状況を振り返る。



図表 4 教育学科児童教育専攻 学科固有 DP 項目別ポイント (N=56)

全体に自己評価が高い傾向があるが、特に「DP6. 実践的指導力」の「子どもを深く理解する力」、「コミュニケーション力」、「DP7. 課題解決能力」の「現代的教育課題への関心

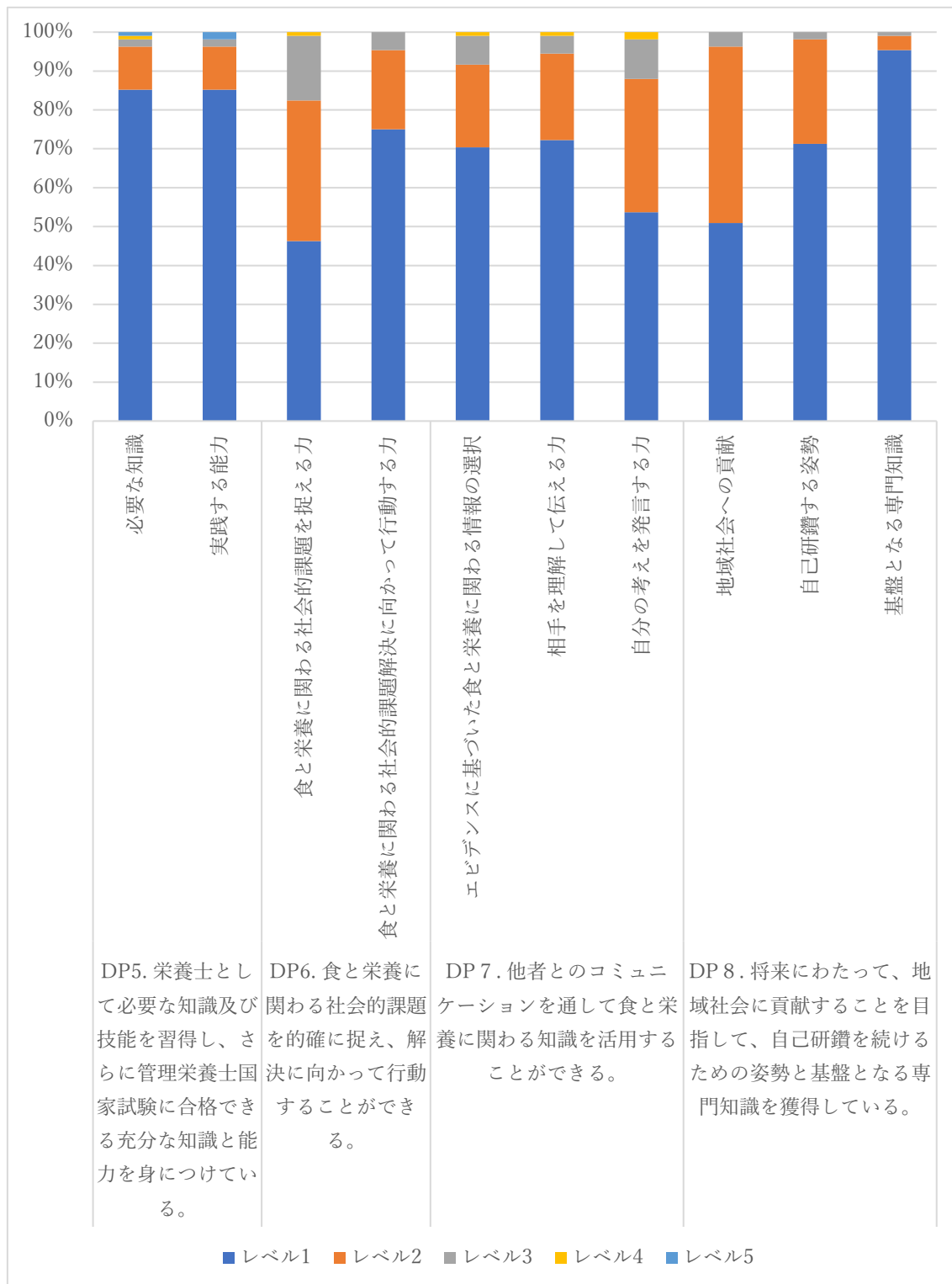
心」については、レベル3以上という自己評価が全体の50%以上を占めている。「現代的教育課題への関心」については、レベル3でも「学校教育における教科指導，生徒指導，及び教育全般に関する課題に関心をもっている」となっており、1年生前期の時点でこの選択肢を選ぶ可能性は十分に考えられるため、記述語の改善が必要である。

「DP6. 実践的指導力」の「子どもを深く理解する力」については、レベル3で「子どもの抱えている課題を理解できる」、レベル4で「子どもの様子から，その状態が分かり，適切なサポートができる」となっており、通常大学の1年生で到達するレベルとは考えがたい。これらについては、学生の自己評価基準と教員の評価基準の乖離が非常に大きいため、今後のカリキュラムの進行とリフレクションを通じて適切に修正されていくことが望まれる。

個別の学生のデータを見ると、学科固有項目の平均値が4.4の学生が1名、3.5以上の学生が4名と全体の10%近くを占めており、これらの学生が設問を十分理解して回答したとするならば、自己評価と教員による評価のすりあわせの機会が必要である。

3.3 食品栄養学科

食品栄養学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 5 のとおりである。回答率は 96.4% と高く、学科全体の状況を反映しているものと考えられる。



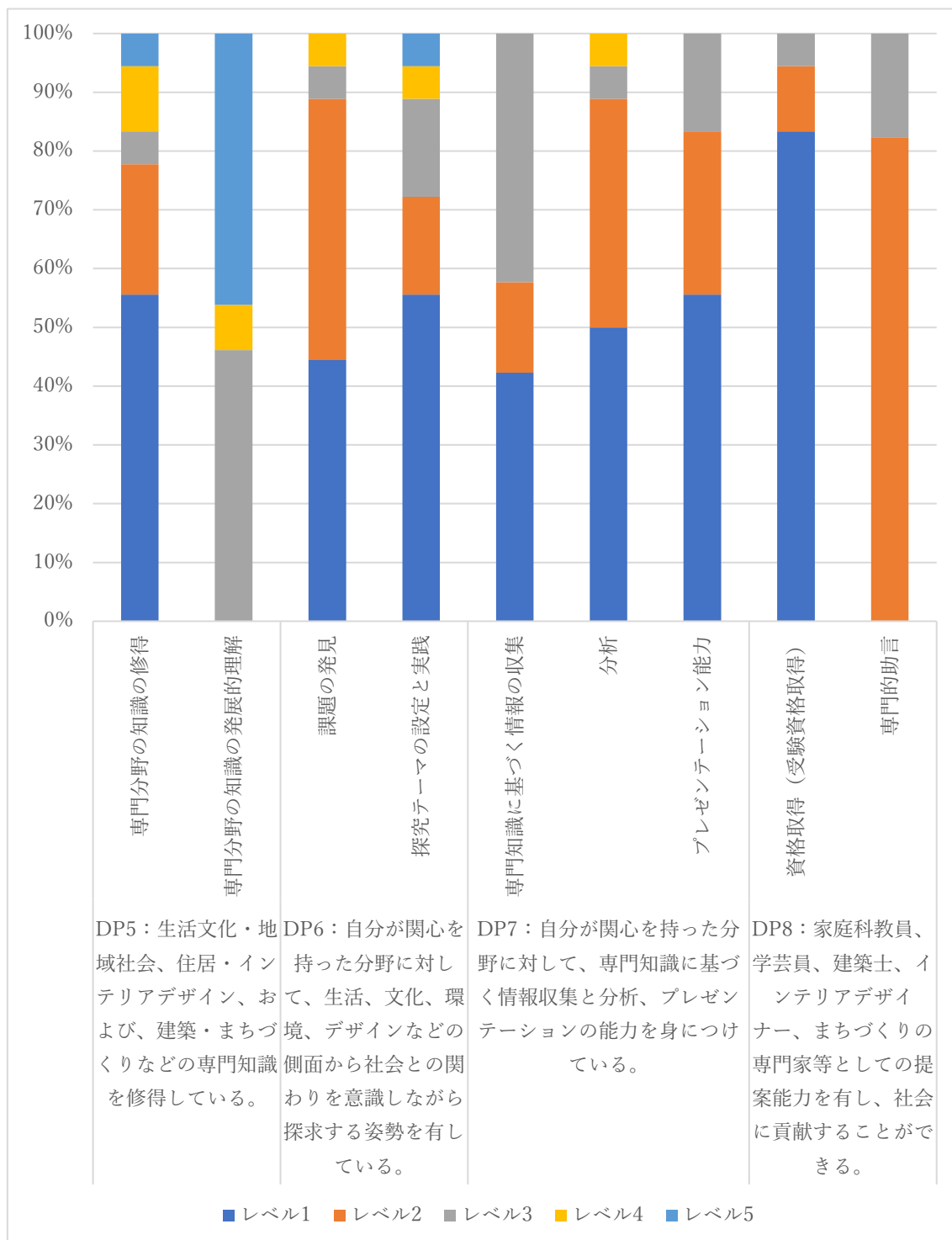
図表 5 食品栄養学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=108)

全体として自己評価は低く学科固有項目の自己評価の平均値は 1.37 となっており、1 年生前期終了時点としては適切な数値であるように思われる。全学共通項目での平均値も 1.52 と、共に適切な範囲であるように見受けられる。

個別の項目についてみると、「DP5. 栄養士として必要な知識及び技能」について「栄養士・管理栄養士として必要な知識を学習し、必要な単位を取得することができる」、「DP 8. 将来にわたって、地域社会に貢献することを目指して、自己研鑽を続けるための姿勢と基盤となる専門知識」について「管理栄養士国家試験受験資格に必要な単位を取得することができる」といった記述語が見られ、パフォーマンス評価の指標としては改善の余地が見受けられる。

3.5 生活文化デザイン学科

生活文化デザイン学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 6 のとおりである。回答率は 31.6%、回答数 18 と全体像を反映するものとは言いがたく、また統計的な意味合いも薄い。



図表 6 生活文化デザイン学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=18)

DP5：生活文化・地域社会、住居・インテリアデザイン、および、建築・まちづくりなどの専門知識を修得している。

DP6：自分が興味を持った分野に対して、生活、文化、環境、デザインなどの側面から社会との関わりを意識しながら探求する姿勢を有している。

DP7：自分が興味を持った分野に対して、専門知識に基づく情報収集と分析、プレゼンテーションの能力を身につけている。

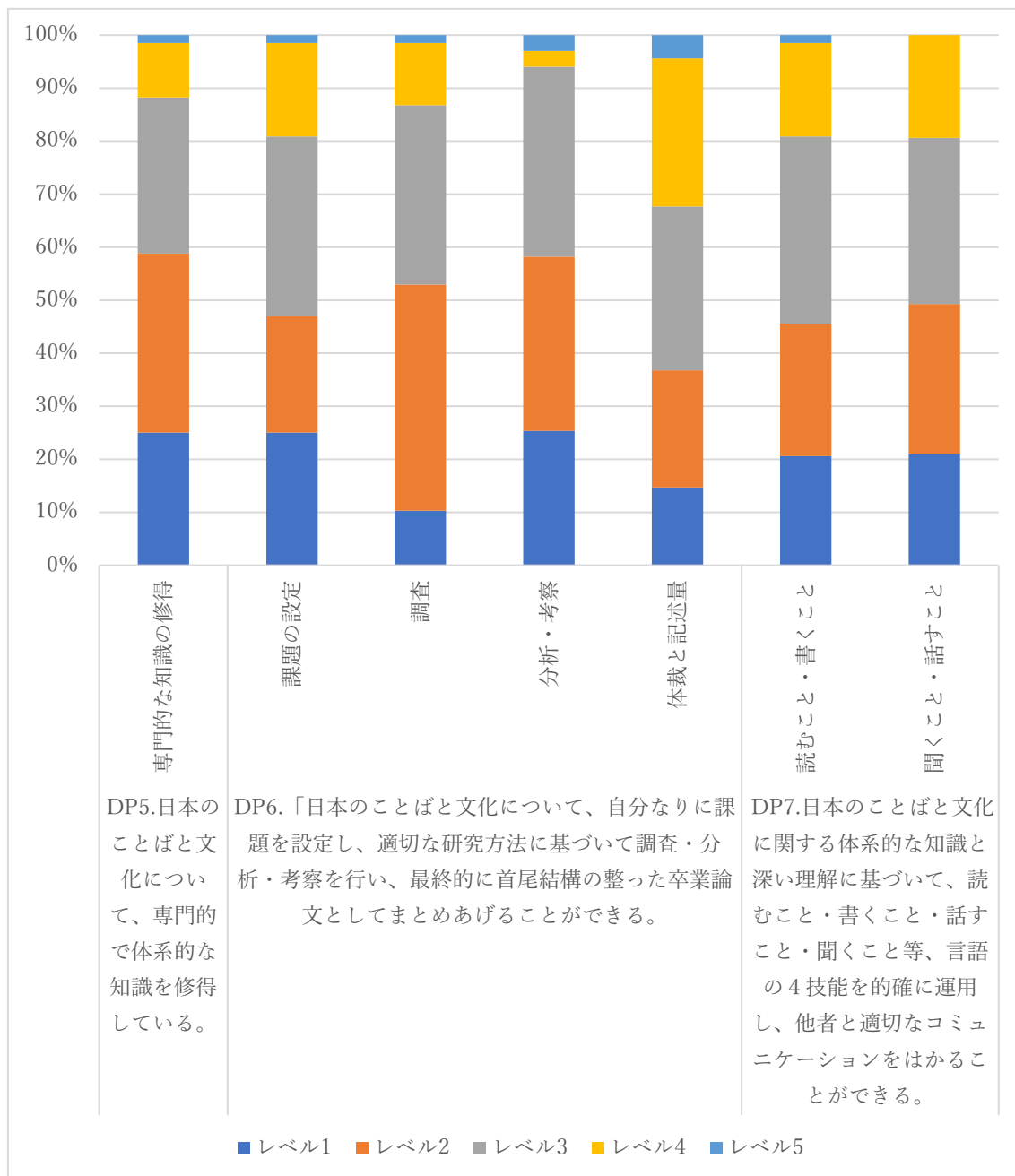
DP8：家庭科教員、学芸員、建築士、インテリアデザイナー、まちづくりの専門家等としての提案能力を有し、社会に貢献することができる。

DPの各項目についてみると、「DP5：生活文化・地域社会、住居・インテリアデザイン、および、建築・まちづくりなどの専門知識を修得している」の「専門分野の知識の発展的理解」についてはレベル1、レベル2が設定されておらず、「専門分野の知識の習得」と分割することが適切であるか議論が必要である。

同様に「DP8：専門家等としての提案能力を有し、社会に貢献：専門的助言」についてもレベル1が設定されておらずアドミッション・ポリシーとの接続もできない状況にある。この項目については、専門的助言の前段階としての興味・関心といったことを評価対象にする可能性が考えられる。

3.6 日本文学科

日本文学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 7 のとおりである。回答率は 73.1%と、概ね全体像を反映すると考えられる。



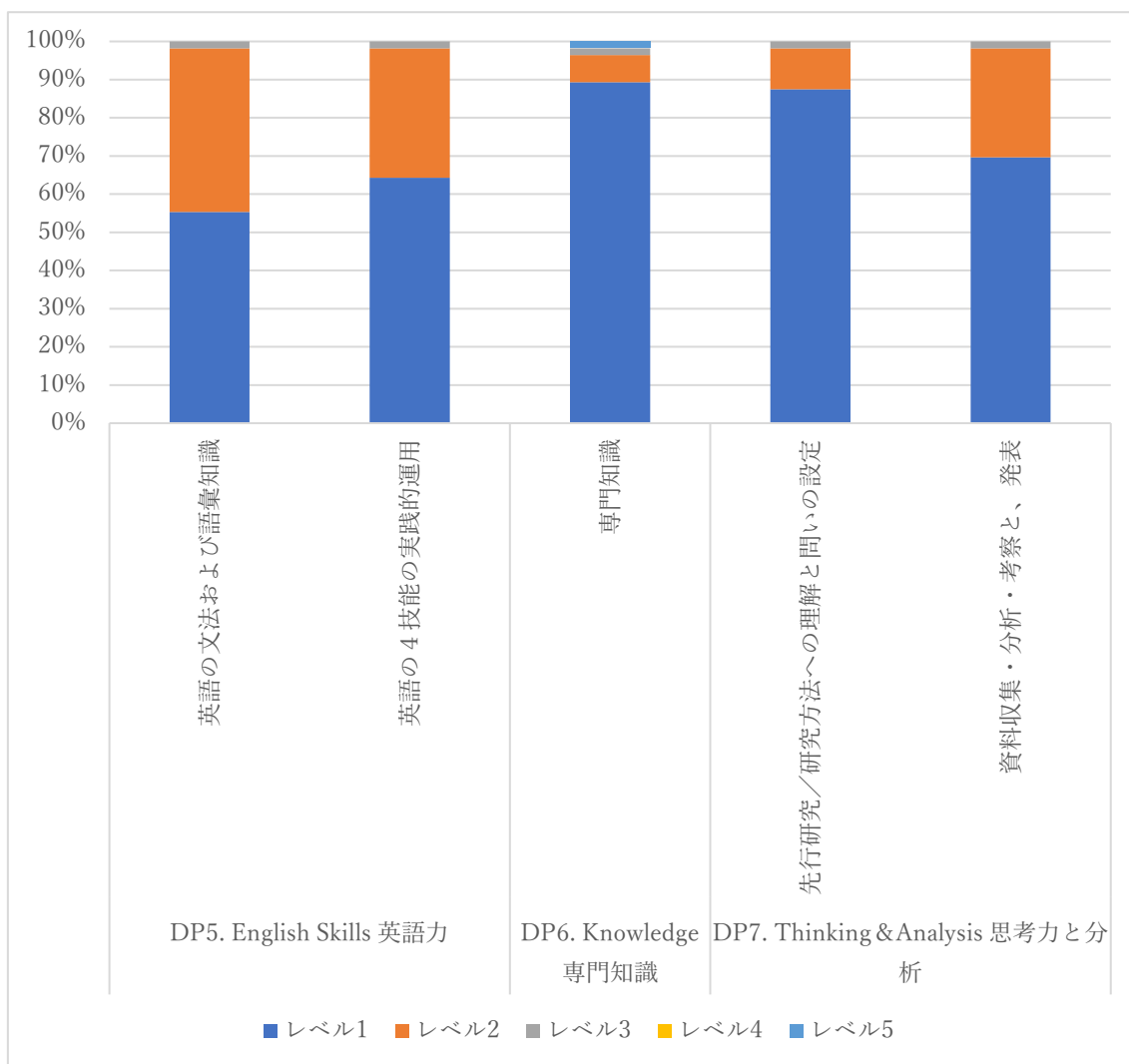
図表 7 日本文学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=68)

全ての項目において、レベル3以上の自己評価が40%を越えている。しかし、ルーブリックに示されているこのレベルの要件としては、「身近な文化と専門的な知識を連関させ、研究の視点や疑問を持ち、問題提起を行うことができる」、「考察に耐えうる参考文献やデー

データを一定量収集し、適切に提示することができる。」、「研究の目的・問いに対応した答えを提示し、調査結果のデータの事実を基に順当な推論を行うことができる」といった、十分な専門教育を要するレベルのものであり、1年生前期終了時点でこれほどの学生が到達しているとは到底考えられない。ルーブリックに示された内容を十分に理解していない可能性が高い。今後のカリキュラムの進行とリフレクションを通じて教員の評価とすりあわせる中でルーブリックの内容を理解し、適切な評価につながるような方策が求められる。

3.7 英文学科

英文学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 8 のとおりである。回答率は 98.2%と全学科中最も高い割合となっており、学科全体の状況をほぼ完全に反映していると言える。



図表 8 英文学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=56)

全体として自己評価は低く学科固有項目の自己評価の平均値は 1.30 となっており、知識の積み上げが特に必要とされる学科の 1 年生前期終了時点としては適切な数値であるように思われる。全学共通項目での平均値も 1.83 と適切な自己評価が成されていると見受けられる。

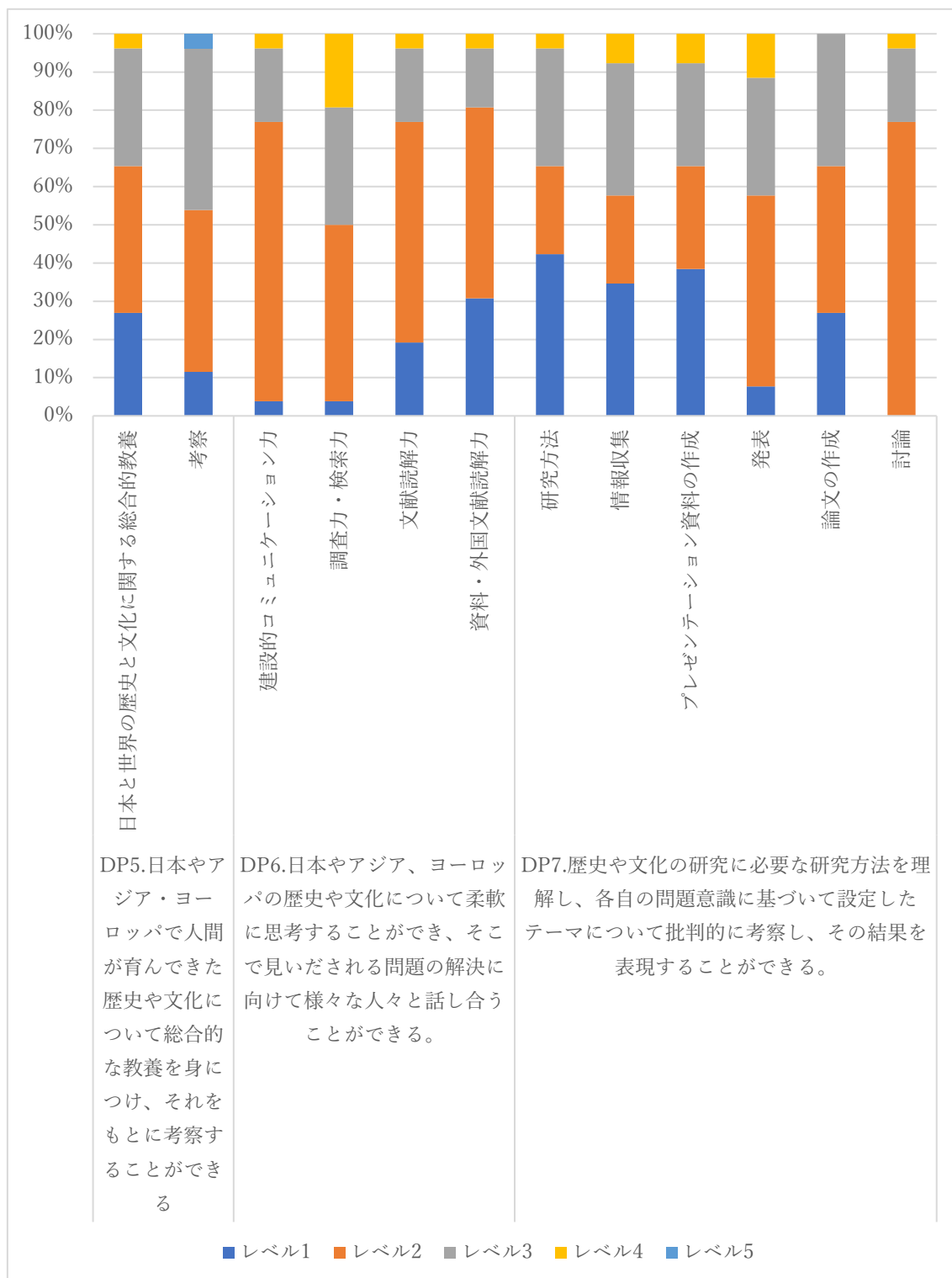
ただし 1 名の学生が、DP5 の「英語の文法および語彙知識」に対して【レベル 1】自分自身について説明するための高校レベルの文法・語彙知識を身につけている」としながら DP6 の「専門知識」に対して【レベル 5】3 年次に選択した専門領域における高度な知識

を身につけ、口頭発表や論文で使うことができる」と回答するなど、明らかに矛盾のある自己評価をしており、十分に設問の内容を読まずに回答している可能性が高いが、ルーブリックに記載されている文言が十分に理解できていないということであれば個別の指導を要する。

また、これに付随して、「3年次に選択した……」という記述語はパフォーマンス評価において適切であるか再度検討の余地がある。

3.8 人間文化学科

人間文化学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 9 のとおりである。回答率は 52.0%、回答数は 26 と、必ずしも学科全体の状況を反映しているものではない。



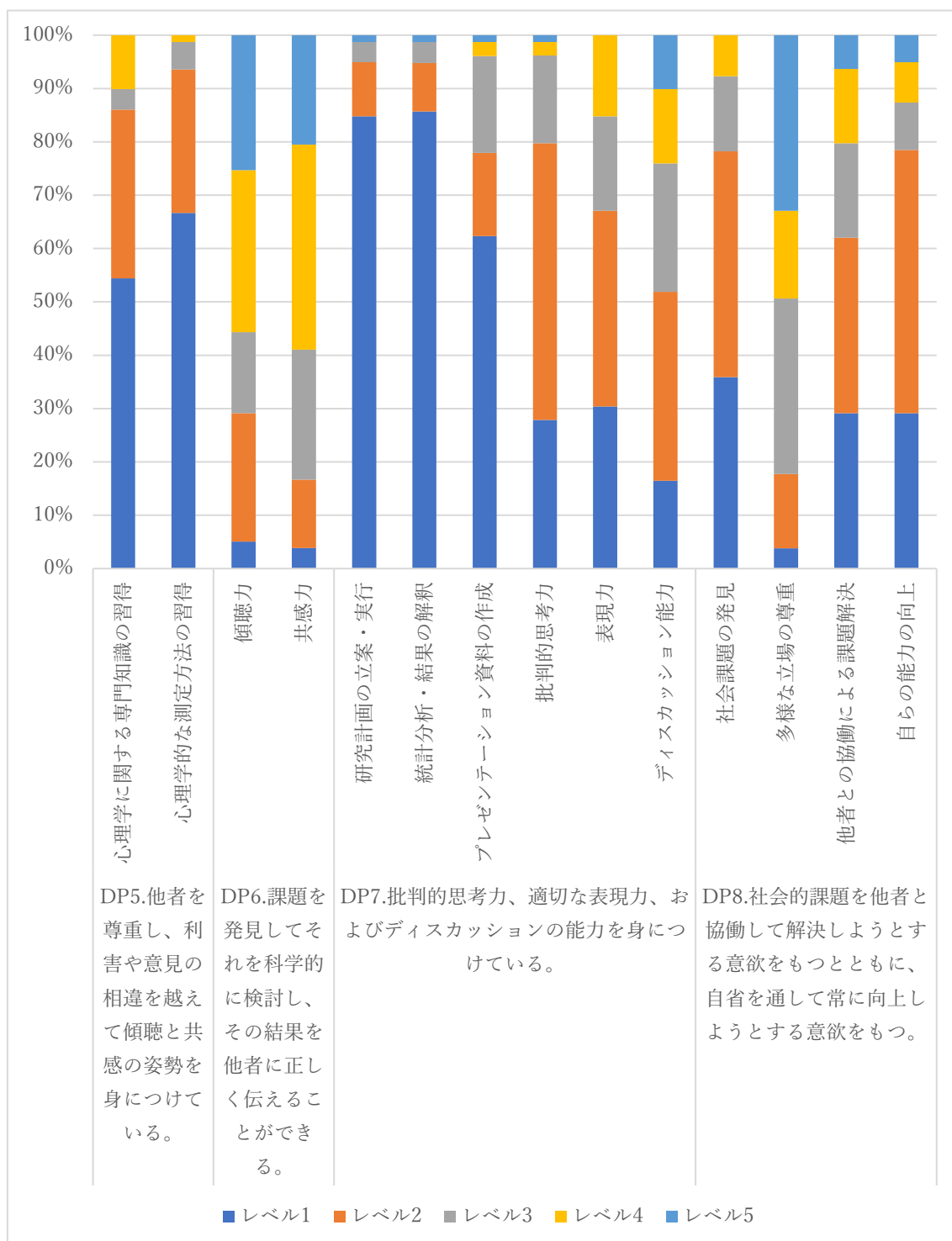
図表 9 人間文化学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=26)

そのなかで、全体の自己評価の平均は 2.18 と概ね適切な値となっている。

個別学生の学科個別 DP 項目に対する自己評価では平均が 3.0 を越えることはまれであるが、全学共通項目の自己評価が 4.7、学科個別項目に対する自己評価が 3.7 という学生が 1 名、全学共通項目の自己評価が 4.5、学科個別項目に対する自己評価が 3.8 という学生が 1 名いる。両者とも全学共通 DP 項目に対する自己評価の多くがレベル 5 となっており、1 年生前期終了時としては明らかに異常な評価といわざるを得ない。ルーブリックの内容を十分に吟味することなく自己評価を行った可能性があるが、そうでない場合には指導に困難が生じる可能性のある学生であると認識し、適切な支援を提供する必要がある。

3.9 心理行動科学科

心理行動科学科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 10 のとおりである。回答率は 96.3%、回答数は 79 と、学科全体の状況を反映していると判断できる。



心理行動科学科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=82)

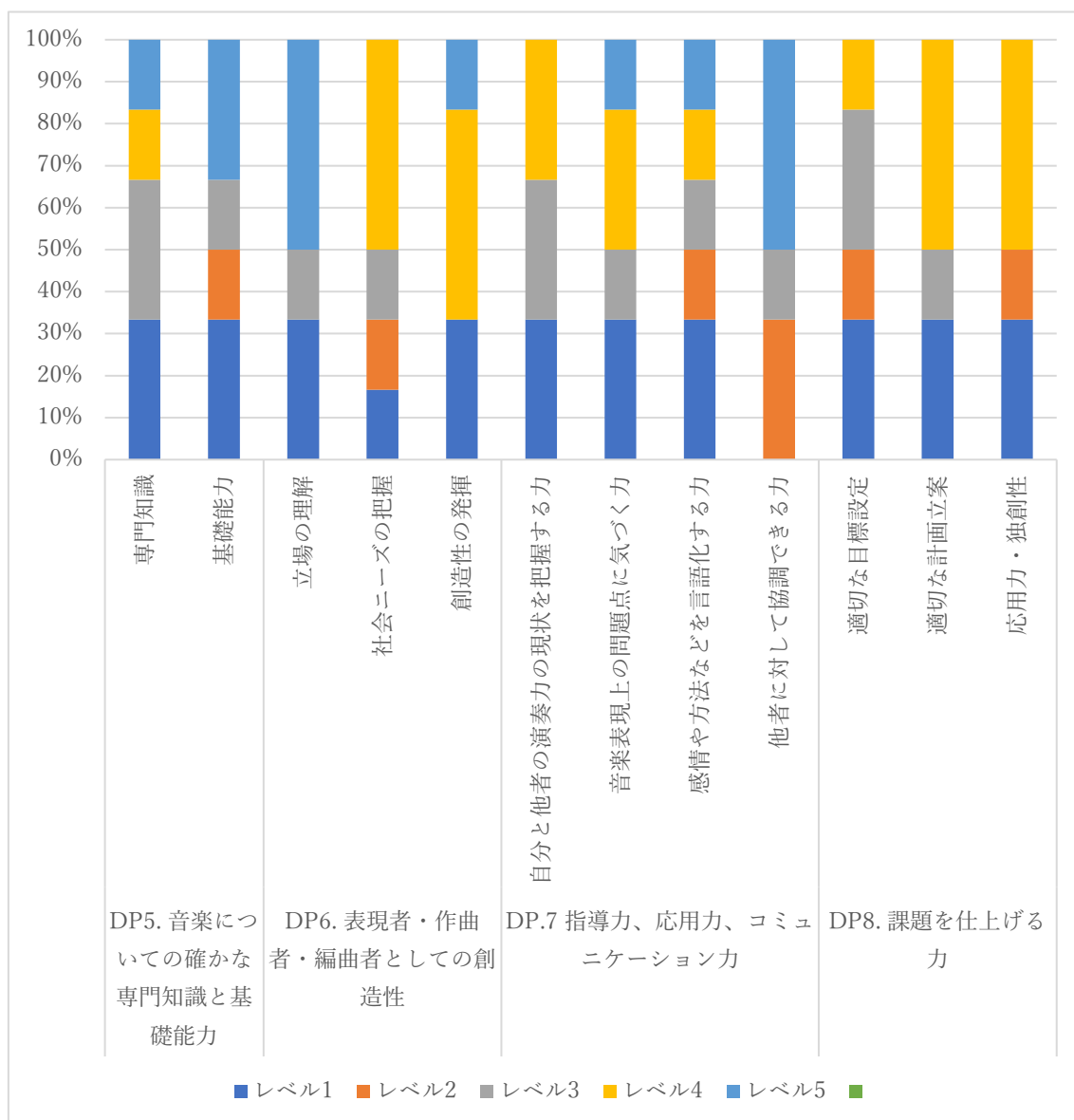
「傾聴力」「共感力」「多様な立場の尊重」といった項目で自己評価が極端に高く、それぞれの項目で半分程度はレベル4以上、すなわち大学卒業以上の能力を有していると評価しているっており、対人コミュニケーションの能力が十分に備わっていると考えている学生が多いことがわかる。

なかでも「多様な立場の尊重」については、33%（76人中26人）が「【レベル5】自分が関心をもてない課題であっても、誰とでも協働して、問題解決に取り組むことができる」と評価しており、現時点では適切な評価をしているとはいいがたい。

この三つの項目については、学生の自己評価基準と教員の評価基準の乖離が非常に大きいため、今後のカリキュラムの進行とリフレクションを通じて適切に修正されていくことが望まれる。

3.10 音楽科

音楽科の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 11 のとおりである。回答率は 46.2%、回答数は 6 となっており、学科全体の状況を必ずしも反映しているものではなく、また、統計的な意味合いは極めて薄いといわざるを得ない



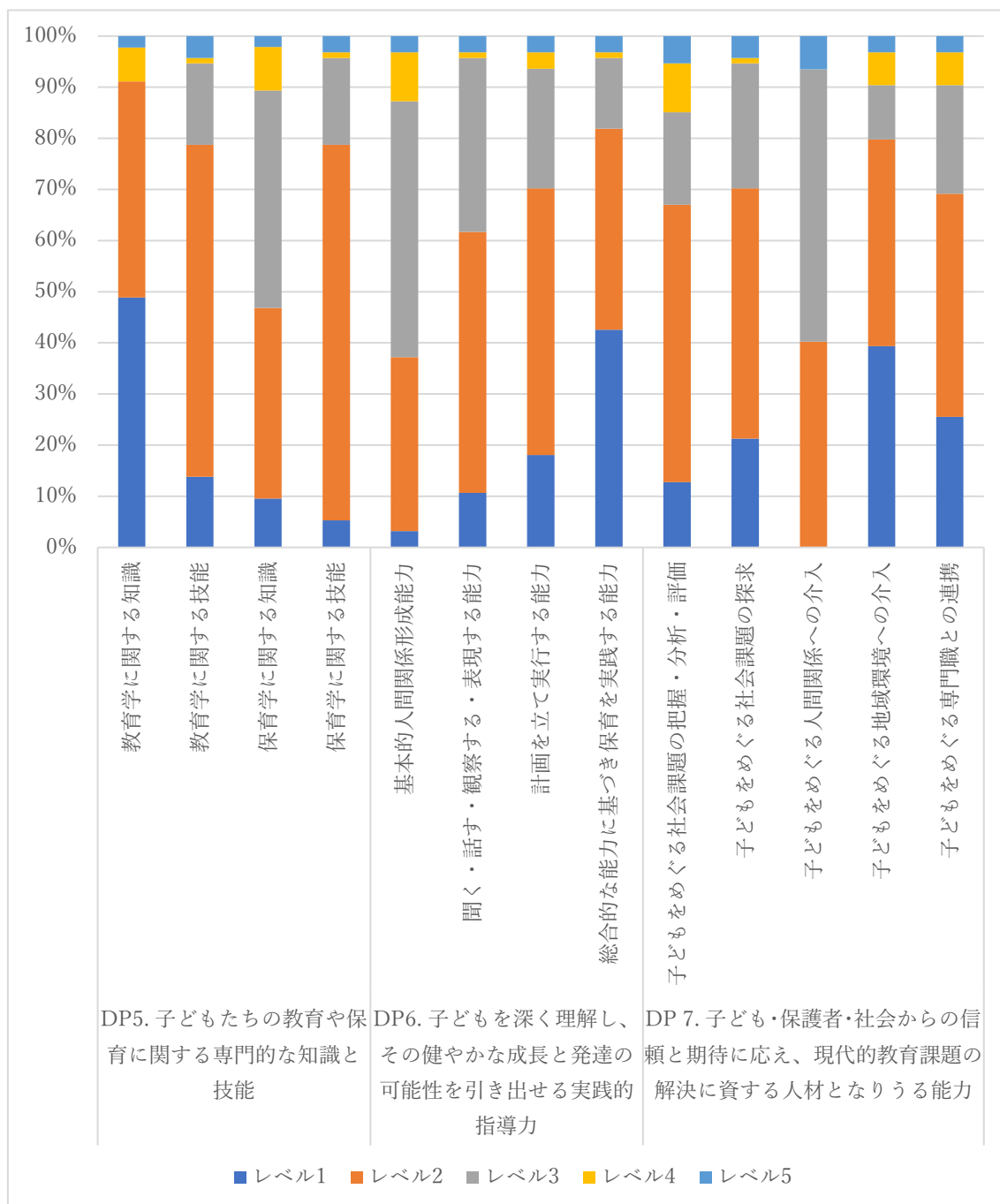
図表 11 音楽科 学科固有 DP 項目別ポイント (N=6)

統計的に意味を持たないデータであるため、個別の学生について見てみる。回答者 6 名のうち 3 名が学科個別 DP 項目に対する自己評価が 4.0 を越えており、音楽の技能に関して強烈な自信を持っていることがうかがえる。うち 2 名は、全学共通 DP 科目に対する自己評価も 4.0 と、多くの項目において大学卒業レベルまたはそれ以上にあると認識している。

これらが、学生自身の十分な内省の結果としての自己評価ということであれば、今後のカリキュラムの進行にともなう個別指導やリフレクションを通して適切なものに修正していく必要がある。

3.11 教育学科幼児教育専攻

教育学科幼児教育専攻の学科固有 DP 項目に対する学生の自己評価は図表 12 のとおりである。教育学科幼児教育専攻では回答率が 93.1%と高く、全体の傾向が十分に反映されていると考えられる。それを前提に、学生の自己評価の状況を振り返る。



図表 12 教育学科幼児教育専攻 学科固有 DP 項目別ポイント (N=95)

全項目の自己評価の平均値は 2.30 と、やや高めの値を示している。個別の学生の状況を確認すると、全項目でレベル 5 を選んだ学生が 2 名、平均が 4 を超える学生が 2 名存在しており、これらの学生が設問を十分理解して回答したとするならば、自己評価と教員による評価のすりあわせの機会が必要である。

項目別には、DP5 の「保育学に関する知識」、DP6 の「基本的人間関係形成能力」、DP7 の「子どもをめぐる人間関係への介入」の各項目でレベル 3 以上の自己評価をした学生が半数を超えている。

DP5 について見ると、「教育学に関する知識」と「保育学に関する知識」は、各レベルの記述語が同一であるにもかかわらず、「教育学に関する知識」では 90%以上の学生がレベル 2 以下に収まっているのに対して、「保育学に関する知識」では、レベル 3 が「保育に関する問題を身近な問題として適用することができる」となっている。保育学に関しては、何をもって「身近な問題として適用することができる」とするか基準が低くなる何らかの要因があると考えられる必要がある。

「基本的人間関係形成能力」、「子どもをめぐる人間関係への介入」の二項目については、人間関係やコミュニケーションに関する項目について自己評価が高くなるという本学学生全般の傾向とも一致する。

おわりに

今回の「学修成果アンケート」はディプロマ・ポリシーの各項目に対するカリキュラム・ルーブリックを教員が作成し、それをもとに学生が自らの学修成果をふりかえり自己評価するものであった。

このような学生の自己評価と教員による評価との間には往々にして大きな乖離が生じる。その要因としては

- ① 学生が十分な内省を伴う自己評価を行っていない
- ② 学生の基準が低すぎる
- ③ 学生が能力を発揮できない場面に直面する
- ④ 評価基準が不適切

といったことが考えられる

①については、内省する意欲を持たず適当に答える場合と、内省するための手がかりが得られずに十分に内省できない場合がある。どちらの場合も、自己評価の方法をていねいに伝えたり、教員が介入してリフレクションの機会を提供したりすることである適切な自己評価ができるようになる。

②については、カリキュラムの進行に伴って、それまで学生自身が「できている」と判断していたことが他者（特にそれを代表する教員）の基準と比較して極めて甘い基準であったことに気づくことで修正されることが多い。

③は、本格的なパフォーマンス評価の初期に頻繁に見られる現象である。それまで、知識として理解していることを「できる」と思い込んでいた学生が実践的な状況で自分の能力を発揮できない場面に直面すると一時的に自己評価が下がる傾向がある。この場合、教員からの適切な形成的評価を受けつつ、少しずつ高いパフォーマンスを発揮していくことで適切な自己評価に至る。

④の場合は、カリキュラムの進行によっても学生の自己評価に大きな変動が見られないことが多い。カリキュラムと評価基準がそもそも乖離しているためである。この場合は、カリキュラム・ルーブリックの内容を大きく見直す必要がある。

学生の自己評価は、教員の評価との差が解消されていくプロセスに意味がある。学生自身がパフォーマンスを適切に評価し、学習目標を設定し、それに向けて学びを自己調整していくことで、生涯にわたって学び成長するための能力が開発される。そのための基礎データとして今回のアンケート結果が活用されることをのぞむものである。